

第1回：古代の「おかね」のふるさと山口県

わが国で「おかね」が国により発行されるようになったのは7～8世紀頃と考えられています。とくに、奈良時代の「和同開珎」（わどうかいちん）は初めての本格的な流通貨幣として大量に鑄造され、その後平安時代後期にかけて約250年の間に合計12種類の銅銭が発行されました（「皇朝十二銭」<こうちょうじゅうにせん>：詳しくは別紙をご覧ください）。実は、これらの古代の貨幣は山口県とたいへん深い関わりがあるのです。

当時の長門国・周防国（現在の山口県）はわが国有数の銅の生産地であったため、古代の銅銭には両国で産出した材料が多く用いられました。現存する「皇朝十二銭」の成分を実際に化学分析した研究によると、当地にあった長登（ながのぼり）銅山（美祢市美東町）や蔵目喜（ぞうめき）銅山（山口市阿東）、於福（おふく）銅山（美祢市）などで産出された材料が用いられたと考えられています^(注1)。



「長門鑄銭所跡」の碑文
(下関市長府安養寺 3-3-9
覚苑寺境内)

また、長門、周防両国には、貨幣を鑄造する役所である「鑄銭司」（じゅせんし・ちゅうせんし）が設置され、当地で産出した銅などを用いて古代のおかねが作られていました。

まず、「長門鑄銭司」が730年頃に設置されました。現在の下関市長府にある覚苑寺（かくおんじ）の境内の一角に「長門鑄銭所跡」を示す石碑が建てられています。近辺の発掘調査では、「和同開珎」とその鑄造に使われた遺物（鑄型、るつぼ等）が多数発見されたほか、「天平二年」（730年）と年号が記された木簡などが出土しています。

その後、825年頃に「周防鑄銭司」が設置され、最後に「軋元大宝」（けんげんたいほう）が鑄造された10世紀までの間、この場所が全国でほぼ唯一の「鑄銭司」となっていました。現在の山口市鑄銭司（すぜんじ）では、今なお地名にその名を残しているほか、当地の遺跡から平安初期の銅銭「長年大宝」や貨幣鑄造に用いた鞆羽口（ふいごはぐち）、るつぼ等が発見されました。なお、「鑄銭司郷土館」では、古代の貨幣に関する資料や、当時の鑄銭司で銭貨を鑄造した手法などをみることができます^(注2)。

日本銀行下関支店 『山口県金融風土記』

日本の「おかね」のルーツともいえるべき古代の銭貨が当地で盛んに作られていたことに思いをはせながら、これらの場所を一度訪れてみられてはいかがでしょうか？



「周防鑄銭司跡」
(山口市鑄銭司四辻)



「鑄銭司郷土館」
(山口市鑄銭司今宿東 1422)

(注 1) 「古代銭貨に関する理化学的研究 — 『皇朝十二銭』の鉛同位体比分析および金属組成分析—」 / 日本銀行金融研究所ディスカッション・ペーパー J-Series No.2002-J-30
2002年9月

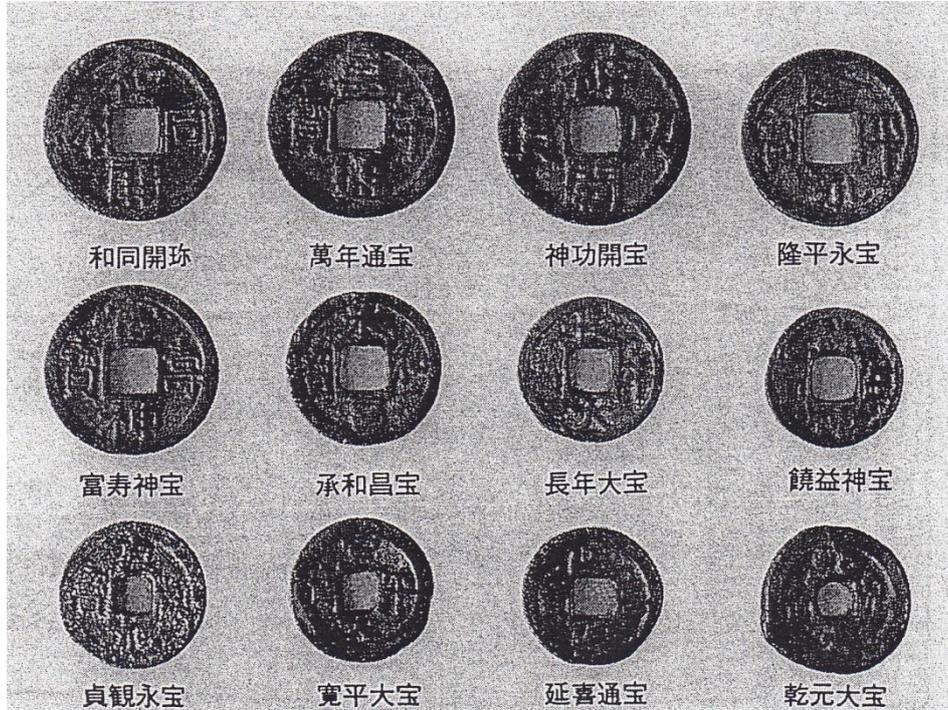
(注 2) 「鑄銭司郷土館」には、このほかにも、江戸時代の金貨や小判、明治から昭和にかけての貨幣や紙幣などが数多く展示されています。

(執筆：岡本敏男、平成 27 年 6 月)

日本銀行下関支店 『山口県金融風土記』

(解説) 奈良・平安時代の銅銭 (「皇朝十二銭」) について

(皇朝十二銭)



わが国では、7世紀以降、唐（中国）に倣い律令国家としての体制が整備され、その一環として、国家による独占的な貨幣の発行・流通が初めて行われました。奈良時代の708年には、唐の銭貨「開元通宝」をモデルとして、「和同開珎」が発行されました。新しい銭貨の流通促進のため、平城京造営などの国家的事業の支払い（給料や資材購入代金）に積極的に用いられたほか、租税を銭貨で納めることを認めたり、銭貨と引き換えに官位を与えるなどの様々な奨励策が打ち出されました。

その後、私鑄銭（にせ金）への対策や、国家財政への補填などを目的に、度々新しい銭貨への改鑄が行われ、8世紀から10世紀中頃までの間に合計で12種類の銅銭が発行されました。

しかしながら、新しい銅銭を発行する度に、「新貨1枚＝旧貨10枚」との交換比率を適用して貨幣流通にしばしば混乱をもたらしたことや、原材料である銅の産出量減少に伴い、時代が下るにつれて銅銭の質が悪化（軽量化や銅の含有量の低下）したことなどを理由に、平安時代の後期には貨幣に対する信用が

日本銀行下関支店 『山口県金融風土記』

著しく低下し、958年発行の「軋元大宝」を最後に国家による銭貨の鑄造は行われなくなりました。

この後、国内では、金属の貨幣に代わって、絹や布（東日本）、米（西日本）が「おかね」として機能する時代が約150年間続きました。さらに、12世紀後半以降、中国（宋・明）から輸入した銭貨（「渡来銭」）が日本国内で「おかね」として広く用いられる時代が16世紀頃まで続き、全国的に流通する貨幣が国内で発行されることは長らく途絶えました。

（参考）皇朝十二銭に関する年表（長門・周防鑄銭司に関する事項を中心に）

	発行年	名称	(よみがな)	備考
奈良時代	708年	和同開珎	(わどうかいちん)	<ul style="list-style-type: none"> 銅銭のほか、初期においては銀銭も発行。 近江国、山城国、大和国、河内国、播磨国、長門国、大宰府(九州)などで鑄造された。 730年 長門鑄銭司の開設「周防国の銅を長門の鑄銭にあてる」(続日本紀)
	760年	萬年通宝	(まんねんつうほう)	<ul style="list-style-type: none"> 同時期に、金銭「開期勝宝」、銀銭「太平元宝」を発行。
	765年	神功開宝	(じんぐうかいほう)	
平安時代	796年	隆平永宝	(りゅうへいえいほう)	
	818年	富寿神宝	(ふじゅしんぼう)	818年 長門国司を「鑄銭使」に改編（類聚国史） 825年 長門国の鑄銭使を停止し、新たに周防国に鑄銭司を設置（類聚三大格） 827年 鑄銭司が岡田(山城国)にあった時に倅い、周防鑄銭司に医師1名を配置
	835年	承和昌宝	(じょうわしょうほう)	
	848年	長年大宝	(ちやうねんたいほう)	
	859年	饒益神宝	(にやうやくしんぼう)	859年 長門国採銅使を任命（日本三大実録） 869年 長門国採銅使が解任され、長門国司がその任務を代行
	870年	貞観永宝	(じやうがんえいほう)	885年 豊前国で採銅技術が未熟なため、長門国から技師を派遣
	890年	寛平大宝	(かんびょうたいほう)	
	907年	延喜通宝	(えんぎつうほう)	940年 天慶の乱(藤原純友)により、周防鑄銭司が焼失
	958年	軋元大宝	(けんげんたいほう)	

（参考資料）

- ・日本銀行貨幣博物館 2007年 図録「貨幣誕生 一和同開珎の時代とくらしー」
 ー 皇朝十二銭などの古代の貨幣をはじめ、日本のお金の歴史についてより詳しくお知りになりたい方は、日本銀行金融研究所貨幣博物館のホームページ (<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>) をご覧ください。
- ・山口市鑄銭司郷土館 1994年「貨幣の歴史」